

# 教室の枠を超えた文章表現活動の試み

—POP 作成の実践報告—

## A Creative Writing beyond Classroom

—A report on a POP project—

山川 史 (早稲田大学) Fumi Yamakawa (Waseda University)

### 1. はじめに

日本の大学で行われている学部留学生に対する文章表現活動の多くがレポートや論文の書き方を扱っている(鎌田 2005, 佐藤 1992)。そのような活動では、主に 1) 文章の基本的な書法、2) 話し言葉や書き言葉の相違、3) 数値や図表の扱い方、4) 引用の仕方や注の付け方、5) 文章校正の仕方、が指導項目として挙げられている。もちろん、このような文章表現の練習は、大学での学習を進めていく上で大変重要であり、留学生が身につけていくべき能力である。しかし、このような文章表現活動に関して 2 点問題点が挙げられる。まず、あまりにも文章表現のジャンルがアカデミックに偏ってしまっていることである。留学生が書く文章というのは、アカデミックの場面だけではない。Eメールでの友達とのやりとりではインフォーマルな文章力も必要である。また、就職活動の際には履歴書で自分をアピールする文章能力も求められる。留学生は論文の書き方だけではなく、生活場面で必要とされる幅広いジャンルの文章表現力を身につける必要があると考える。2 点目の問題点として、文章表現活動が「教師」という架空の読み手に対する練習にとどまっていることが挙げられる。書くという作業は、伝えたい内容があり、また伝えたい読み手がいればこそ意味を持つてくるものだと考える。したがって、学習者にそのような環境を設定することが重要である。そこで、異なるジャンルの文章表現を学び、それを実在する読み手に対して書くことにより、学習者の文章表現をさらに引き出すことができないだろうか考えた。そのためには、教室内活動を教室外とリンクさせる必要がある。そこで、図書館が企画した「読書コメント大賞」を利用し POP を作成することにより、教室の枠を超えた文章表現活動を試みた。

### 2. 「読書コメント大賞」の概要

「読書コメント大賞」とは、大学の図書館が読書推進のために企画したイベントである。応募内容は、本の POP である。ここでの POP とは、自らが選んだ本についてアピールしたい内容を書いた手書きの広告のことである。その広告には、本のタイトル、著者名、出版社名、コメントが含まれていなければならない。ただし、マンガ、コミック、携帯小説、雑誌の POP は対象外である。この「コメント大賞」は、毎年、春、夏、秋、冬の四回実施されている。応募資格は、学部の学生である。また、選考基準は、1) コメントの内容、2) 視覚効果、3) 本の選択の三点である。毎回、200 名前後の応募があり、その中から、大賞に 7-9 名が選ばれ 2000 円分の図書カードが贈られる。また、優秀賞に 30-50 名が選ばれ、1000 円分の図書カードが贈られる。そして、参加賞として応募者全員に文房具がプレゼントされる。なお、大賞と優秀賞に選ばれた作品は図書館に展示されることになっている。

この「読書コメント大賞」を教室内活動とリンクしようと試みた理由には、主に 4 つある。まず 1

つ目に、文章のジャンルがアカデミック・ライティングとは異なることである。「読書コメント大賞」の文章の種類は、推薦文に当たる。2つ目に、この「読書コメント大賞」には、実際の読み手が存在することである。日本語の授業のクラスメートや教師ではなく、日本語クラス以外の学生や教師に自分の書いた文章を読んでもらうことができるいい機会である。3つ目の理由は、POPを作成するということは、書く作業だけではなく読む作業も必要とするからである。この授業は書くことが中心であるが、そのほかの「読む」「話す」「聞く」の技能も常に一緒に使用できるような活動を進めている。4つ目に、POPをひとつの作品として仕上げられることが挙げられる。そのことにより、学習者は達成感を感じることができると考える。以上の理由で、「読書コメント大賞」を教室活動に取り入れることにした。

### 3. 実践クラスの概要と協働学習

実践したクラスは、日本のある私立大学の上級レベルである。学生の日本語能力は、日本語能力検定試験1級レベルである。学生数は全部で4人で、学位取得を目的とした学部留学生である。学生の内訳は男性2名、女性2名で、中国語母語話者が2名、ベトナム語母語話者が2名である。このコースの第一の目標は、目的に応じた的確な文章が書けるようになることである。その上で、各文章表現活動を通して、社会生活の中で日本語を用いて他者とコミュニケーションをとり、自分の考えや思いを表現できる力を磨くことを目指している。そのため、教材はEメールや履歴書、小論文など学生の身近にある素材を使用している。授業日は、週に1回で、1学期は全部で12回ある。また、1回の授業は90分である。このコースは1学期を通して「協働学習」を行っている。

協働学習とは、学習者同士が協力して学び合うことで問題解決していく学習方法である（池田&館岡 2007）。この学習方法の理念的背景には、Vygotsky (1978) の知的な能力は他者とのかかわり合いの中で発達する、という考えがある。また、協働学習が注目されるようになった歴史的背景には、言語教育観の変遷が挙げられる。言語を教えるということは言語構造を中心とした知識を伝達することであるという考えから、学習者が実際にコミュニケーションできるように教えることだという考えに変わってきた。さらには、言語教育とは、学習者が自らを発見するためにその言語を用い、言語を自律的に学ぶことができるように支援することであるという教育観に変わってきた。このような背景があり、日本の日本語教育では、協働学習が積極的に取り入れられるようになってきた。

では、従来型の学習法と協働学習とは何が違うのだろうか。その大きな違いを池田&館岡（2007）を基に、表1のようにまとめた。

表1 従来型の学習と協働学習の比較

	従来型の学習	協働学習
主体	教師	学習者
形態	一斉授業	参加型
方法	競争	協働
単位	個人	複数
ゴール	目的により限定	創造

従来型の学習では、教師が主体でありトップダウンの仕組みであった。しかし、協働学習では学習者が主体となり、多様な文化的背景をもつ学習者同士の対等性が保障される仕組みに変わった。また、形態は、従来型の学習では一斉授業である。そのため、学習者は受け身になりやすかった。しかし、協働学習では、学習者自らが進んで参加する形態をとっている。そして、従来型の学習方法では、学習とは個人個人で行うものであり、そこには競争が生まれる仕組みになっていた。しかし、協働学習では、二人以上の複数で学習を行うため、競争ではなく協力して学び合うことが必然的に生まれてくる。また、従来型の学習のゴールは、ある決まった文型や語彙を習得することが目的であり限定されていた。それに対し、協働学習では、創造をゴールとしている。つまり、学習者が一人で行っていた学習に他者が加わることで、その学習プロセスが発展し、やがては共有の創造を生み出すということである。このような学習方法における教師の役割とは、学習者の背景を尊重し、対話を生み出し、相互の学び合いを促進するための *facilitator* であると言える。

#### 4. 実践の試み

実践は、2009年秋学期に行った。全部で12回あるうちの3回分をこの教室の枠を超えた文章表現活動としてPOP作成にあてた。表2にコースのスケジュールを示す。

表2 コースのスケジュール

回	日にち	内容
1	9月28日	オリエンテーション
2	10月5日	お店やイベントの広告
3	10月19日	わかりやすいマニュアル①
4	10月26日	わかりやすいマニュアル②
5	11月2日	場所や交通の案内
6	11月9日	企画や提案を出す①
7	11月16日	企画や提案を出す②
8	11月30日	POP
9	12月7日	POP
10	12月14日	POP
11	12月21日	レポートを書く
12	1月18日	レポートを書く

このコースでは、学生の生活に合わせ、意見文中心のレポートの書き方だけではなく、説明文や提案文、依頼文などできるだけ多くの文章表現のジャンルがカバーできるよう心がけた。なお、POP作成には本を読む作業が必要であり、これは時間がかかるため学生には学期の初めに本を1冊選び読み進めておくようあらかじめ伝えておいた。

次にどのようにPOP作成を行ったのか、3回に分けてその実践報告をする。

#### 4-1 1 回目の授業概要

この日は、90 分の授業を 3 つの活動に分けて行った。まず、最初の活動は教室内でのグループによる話し合いである。その内容は、読書の経験と POP についての二つであった。読書の経験については、これまで日本語でどのような本を読んだことがあるか、またどんなジャンルの本を読んだことがあるか、印象深い本はあるかなどが話し合われた。その結果、日本語の本を読んだことがあると言っても勉強のために読んだ本が多く、楽しみのために読んだ本はほとんどないということであった。その理由として、毎日の宿題やアルバイトで忙しく、楽しみのために本を読む時間的余裕がないことが挙げられた。また、POP についての話し合いは、この用語を聞いたことがあるかどうかという質問から始まった。しかし、広告としての POP を知っている学生は 1 人だけであった。このような話し合いの後、学生を実際に図書館に連れて行った。

図書館では、展示されている過去の「読書コメント大賞」の受賞作品を鑑賞し、POP がどのようなものであるか確認した。それらの受賞作品は色やデザインなどさまざまな工夫がされており、学生たちはそれに見入っていた。また、図書館員から直接「読書コメント大賞」の応募について説明してもらった。

その後、再び教室に戻り、鑑賞した POP の感想を話し合った。また、どのように本を選べばよいか、ということについても話し合った。その結果、自分の好きな作家で選ぶ、今売れている本をインターネットで検索する、日本人の友達に聞く、本屋に行く、などが挙げられた。この日は、次の授業までに自分が選んだ本について紹介できるようにすることを宿題として終えた。

#### 4-2 2 回目の授業概要

この日は、二つの活動を行った。1 つ目は、学生がそれぞれ選んだ本の紹介である。まず、本のタイトル、著者名、あらすじをお互いに紹介した。そして、その本のどのような点に共感したのか、どのような点を POP としてアピールしたいと思っているのか、などが話し合われた。それぞれの学生が異なったジャンルの本を選んできたため、お互いに大変興味深く聞いている姿が見られた。

2 つ目の活動は、POP の下書きである。実際に下書きをする前に、いくつかの点について話し合いを行った。例えば、どのようなコメントにすればよいか、どのようにしたら目を引くようなレイアウトができるか、配色はどうするのか、またどのような表現方法を使えば効果的になるか、などが話し合われた。その結果、コメントの内容については、キーワードを入れること、話の全てを取り上げるのではなく一番伝えたい部分を取り上げること、わかりやすい言葉で書くことなど挙げられた。また、絵や色については、本の表紙の絵や色を取り入れる、コメントと合うような挿絵を描く、絵を立体化させる、動くような仕組みを作る、などさまざまなアイデアが挙がった。表現方法に関しては、「だ体」で書くよりも「です・ます体」の方が読み手にとって親しみやすいのではないかと、強調したい部分はカタカナを使用したらいのではないかと、などという意見があった。このような話し合いの後、実際に A4 サイズの紙に下書きを行った。授業内で下書きを終えることができなかった学生には、次の授業までに下書きを終えてくることをその日の宿題とした。

#### 4-3 3 回目の授業概要

この日は、まず、学生がそれぞれ仕上げてきた POP の下書きについて意見を交換した。面白い点、

自分と同じような点／異なっている点、もっと説明がほしい点、わかりにくい点などが話し合われた。このような話し合いをすることで、自分のPOPを客観的に見ることができ、修正を加えよりよい作品に仕上げられるようにした。なお、日本語の間違えは学生同士で直した後、最終的な確認は教師が行った。

その後、修正した下書きを基にPOPを作成していった。仕上がったPOPは図書館に持って行き応募した。

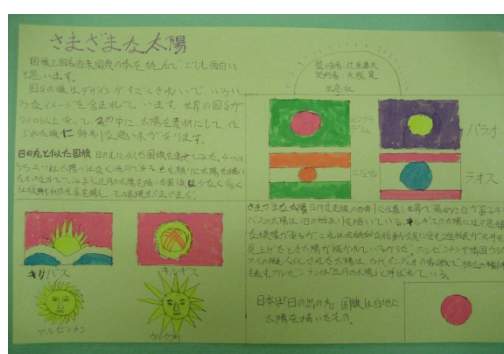
## 5. 学生のPOP作品

次に完成した学生のPOP作品を紹介する。どの作品も時間をかけ丁寧に作られており、すばらしい作品に仕上がった。

(1) 『言葉図鑑』五味太郎監修  
偕成社 (1993)



(2) 『さまざまな太陽』辻原康夫監修  
出窓社 (2009)



(3) 『不思議な図書館』村上春樹・佐々木マキ  
講談社文庫 (2008)



(4) 『いい睡眠は、いい人生をつくる』  
斉藤英治 三笠書房 (2005)

## 6. アンケートの結果

この活動を終えて学生にアンケートを行った。質問は大きく4つに分け、最後には感想を書いてもらった。表3にアンケートの質問とその答えをまとめた。

表 3 POP に関するアンケートの質問とその答え

質問 1 : 本を選ぶにあたって	
①なぜ／どのように選んだか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 以前に読んだことがあり、面白かったから。</li> <li>→ その本を使って勉強したことがあり大変役に立ったから。</li> <li>→ 小さい頃から、地理に興味があったから。</li> </ul>
②難しかった／困った点	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 他にも好きな本があったので迷った。</li> </ul>
質問 2 : コメントを書くにあたって	
① 難しかった点	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 読み手に分かりやすく書くこと。</li> <li>→ 読みたくなるような表現で書くこと。</li> </ul>
② 工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 読み手に語りかけるように「です・ます体」で紹介した。</li> <li>→ おもしろく紹介できるように、語彙を選んだこと。</li> </ul>
質問 3 : POP 作成にあたって	
① 難しかった点	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 絵を書くこと。</li> <li>→ 絵とコメントが合うようにすること。</li> </ul>
② 工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 絵や全体のレイアウト／絵を動かせるようにした。</li> <li>→ 目を引くような色の選択をした。</li> </ul>
質問 4 : 作業を終えて	
① また応募したいと思うか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ はい (全員)。</li> </ul>
② その理由は?	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 違う本を紹介してみたいから。</li> <li>→ 今度はもっと上手に POP が作れると思うから。</li> </ul>
③ 改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 本を読む時間がほしい。</li> </ul>
感想	
<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 楽しかった。でも、文法力と表現力が足りないと気づいた。</li> <li>→ 他の人に、自分の好きな本について「ここがいいよ」と伝えることが楽しかった。今までの文章表現のタスクとは違って、実際のコンテストに出したから、緊張した。</li> <li>→ POP のデザインをするのが おもしろかった。読み手に分かりやすく表現することを意識するようになった。</li> <li>→ 他の人に見てもらふことで、わかりやすくするための表現を考えるようになった。POP を作成したことで、読む人の立場を考え、さらにコミュニケーションの仕方について考えた。普段の自分の話し方についても気づきがあり、もっと上手にコミュニケーションをとりたと思った。</li> </ul>	

アンケート結果から、文章表現に対する意識が以前より高まったのではないと思われる。改善点で、本を読む時間がほしいということが挙げられている。この理由は、学期中は授業で忙しく楽しみにために本を読む時間をとるのは難しいということであった。この点に関しては、コースのスケジュールを調整し、夏休みなどの大きな休みを利用することで学生への負担を減らすことができるのではないと思う。今回は、上級レベルでこの活動を行ったが、読む本の難易度または工夫次第では中級または初級でも実践可能な活動である。



## 7. おわりに

文章表現活動に関して、2点提案したい。まず、1点目は、教室内活動を教室の外とリンクさせることである。そのことにより、実在する読み手への文章表現活動が可能になる。例えば、学生が作った短歌や俳句を「コンテスト」として日本人に審査してもらおうという活動があるが、これも外とリンクさせた文章表現活動にあたるだろう。教室内にとどまるのではなく、外とリンクさせることにより活動そのものが生き生きとし、学生のやる気をより一層引き出すことができるのではないかと考える。2点目は、日々の活動に協働学習を取り入れることである。学習者に活動をさせる時には個人個人でさせるのではなく、学習者同士がお互いに協力し合うことで、学びの過程を共有することが大切であると考え。このことにより、学習者は自分への新しい発見をし、他者への理解を深めることができる。そして、その中で学習者同士の相互の信頼関係が生まれてくる。このような基盤があってこそ学習者の意見や知識や経験が効果的に引き出されると考える。

## 参考文献

- 池田玲子・館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門: 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 小川貴士(編), 細川英雄・西口光一・矢部まゆみ・岡本能里子・三代純平・小澤伊久美・丸山千歌・西條美紀(2007)『日本語教育のフロンティア: 習者主体と協働』くろしお出版.
- 鎌田美千子(2005)「学部留学生の発表活動に必要な日本語文章表現指導: レジюме・提示使用に見られる問題点とその指導」『宇都宮大学外国文学研究会』54号, 53-66.
- 佐々木倫子・細川英雄・砂川裕一・川上郁雄・門倉正美・牲川波都季(編), クラムシュ, C.・ロ＝ビアンコ, J.・ザラト, G.・バイラム, M.(2007)『変貌する言語教育: 多言語・多文化社会のリテラシーとは何か』くろしお出版.
- 佐藤勢紀子(1992)「論文作成をめざす作文指導: 目的に応じた教材の利用法」『日本語教育』79. 137-147.
- Vygotsky, L.S. (1978). *Mind and society: The development of higher mental processes*. Cambridge, MA: Harvard University press.